様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７２７０

研究課題名（和文）流布本『保元物語』『平治物語』の成立と16世紀の文学の関連

研究課題名（英文）Relation the rufubon of "Hogen monogatari" and "Heiji monogatari" and 16th century literature

研究代表者
滝澤　みか（TAKIZAWA, Mika）

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：２０７７８６８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　『保元物語』『平治物語』の諸本のうち、物語の最終段階に位置する「流布本」と呼ばれる諸本の成立が、16世紀の動乱期における教訓書の隆盛と関わる可能性が高いことを明確にしつつ、流布本を中心とした『保元物語』『平治物語』の諸本調査・内容分析といった、今後の研究の土台となる成果を得られた。流布本の特性を基軸に、16世紀の関連する文学作品などとも比較することで、流布本の成立の意義を示すことが出来た。

研究成果の概要（英文）：While I clarified that the rufubon of "Hogen monogatari" and "Heiji monogatari", which is located at the final stage of the modification of the story and called " rufubon", is related to the prosperity of the books of lesson during the turbulent period of the 16th century, I obtained results that will be the foundation for future research, such as survey of the books and analysis of the content about "Hogen monogatari" and "Heiji monogatari" centered on rufubon.By comparing the characteristics of the rufubon and other relevant literary works of the 16th century, it was possible to show the significance made of the rufubon.

研究分野：軍記物語

キーワード：保元物語　平治物語　流布本　16世紀　流布本　戦国　室町　軍記物語

１．研究開始当初の背景

『保元物語』及び『平治物語』とは、『平家物語』と同ジャンルに区分される「軍記物語」の作品である。軍記物語は、改作されつつ人々に享受されてきたため、一つの作品の中でも内容が異なる改作本が多く存在する。『保元物語』『平治物語』の場合であると、その改作の流れは 3 つに大別できる。しかし最終的な改作段階に位置する「流布本」と呼ばれる諸本は、史上最も人々に読まれた内容であるにも関わらず、研究が少ない状態である。それはかつて永積安明氏が、先出諸本に比べ、流布本は構想がなく文学的価値が低いという評価を下したこと（日本古典文学大系、1961）が影響していると考えられる。これに対し松田孝子氏は疑問を示した（「平治物語十一類本の研究」1982）が、現在も先出諸本を重視し、流布本を軽視する研究が続いている。

研究方法においても、両物語は一組の作品として読まれてきたことが確かであるにも関わらず、別々に分析され続けていることや、単なる現象の指摘に留まらず、社会情勢や当時の文学を取り巻く状況などを考慮した、総合的視野に基づく厳密な流布本研究は存在していないという問題がある。そこで報告者は、両物語を比較・検討することで成立期や内容の特性に着目し、成果を残してきた。

成立期については、1600 年近くと思われていたその下限を 1550 年～1560 年前後と特定し、これまでの下限に関わる先行研究による指摘がいずれも厳密性や正確さを有さないものであることを明らかにしている。これにより、上限に関する先行研究と併せると、流布本の成立は応仁の乱を含む 1446 年～1560 年前後の間となる。さらに流布本両物語を併せて検討することで、両物語が影響関係にあり、同時代の他作品とも関わりがあることを指摘している。

また内容については、流布本両物語は互いに影響し合いながらも価値観が異なることを明らかにしている。流布本『保元物語』は〈秩序〉を価値観とし、「世を乱してはならない」と説き、流布本『平治物語』は〈武士の振舞い方〉を価値観とし、「臣下がどう振舞うべきか」を説いていると言える。

享受の様相については、流布本両物語を実際に読んでいた『榻鳴暁筆』の作者が当時を乱世と捉えて嘆いた人物であり、流布本両物語は混乱する社会に向けての作品である可能性を指摘している。

このように、流布本両物語が特定の価値観を明示するという特性を持つのは、その成立期が 16 世紀という社会の動乱期であることと無関係ではなく、同時代に教訓書が隆盛していることにも影響を受けている可能性が高いのではないかという仮説をもったことが本研究の背景・動機として挙げられるのである。

２．研究の目的

本研究は、『保元物語』『平治物語』の最終的な改作である「流布本」の成立が、16 世紀の動乱期における教訓書の隆盛と関わることを解明し、その成立の意義を明らかにすることを目的としている。

その中でさらに細かく 3 つの目的を定め、研究を進める計画を立てた。

(1)　流布本研究において基準となるテキストと、流布本の特徴を解明する。

現在、1600 年前後に出版された古活字本が流布本の善本とされているが、同じく善本の可能性がある写本の存在も先行研究において報告されており、基準とするテキストを定める必要がある。その作業は、出版以前に流布本の本文がどのように生成・流動・確定したのかを把握することでもある。

さらに成立期の近い改作本とテキストを比較することで、流布本の特徴を明確にすることも意図している。

(2)　16 世紀の文学の特性を解明する。

流布本両物語の成立の意義を明らかにするには、その背景にある 16 世紀の文学の特性を解明する必要があると考えられる。流布本両物語は教訓的な側面を持つと考えられることから、同じく教訓的な性格を持ち、当時多く作られていた教訓書・武家故実書・御伽草子などを中心に収集・分析し、当時の文学の動向を把握していくことを目指す。

(3)　流布本両物語の成立の意義を解明する。

上記の(1)・(2)の調査結果を踏まえて、流布本と教訓書などの作品を比較し、価値観の相違点などから関連性を把握し、流布本両物語の成立の意義を明らかにしていくことを目指す。

16 世紀はそれ以前に比べて、教訓的な作品が多く作られた時代と考えられるが、それは社会が動乱期であったことも関わる可能性があり、当時の社会情勢・乱や物語への認識を整理し、当時の文学の特性が、社会からどう影響を受けて派生したのかということも併せて解明していく。

以上のような 3 つの細かな目的を設定することで、本研究における最終的な目的に対して段階を追って到達することを目指した。

３．研究の方法

流布本両物語の成立に教訓書の隆盛や社会情勢が影響している可能性が高いという仮説を立証し、その成立の意義を明らかにするため、本研究では多角的な資料調査を行うこととした。

具体的には、流布本両物語の本文に加え、流布本以外の両物語の改作本、教訓書、武家故実書、軍記物語に限らない他の文学作品、あるいは史料など、16 世紀頃に関わる資料を幅広く扱うこととした。

そして以下のような3つの研究方法を設定し、各方法に関わる資料を収集し、2ヶ年度にわたって検証することを目指した。

(1)　流布本両物語の成立過程を調査
（調査対象：流布本両物語の写本・流布本以外の改作本）
善本の候補となる流布本両物語の写本を調査し、現在の善本である古活字本と比較して基準となるテキストを定めると共に、流布本の本文が確定するまでの流れを追う。
この先行研究としては原水民樹氏の調査報告が挙げられるが、それも含めて諸本を検証し、誤字脱文の指摘の把握だけではなく、なぜ違いが起きたのか、文脈の意味を考え、写本ごとの特質を捉えることを目指した。
また、流布本と京図本（京都大学附属図書館本）系統の両物語を比較することも方法として掲げた。京図本は流布本と成立が近く、室町時代に作られ影響関係が認められるが、その指摘はこれまでされていない。近い時期に成立した両者を比較することで、流布本段階で明確になった特徴を整理し、物語自体がどう変化してきた結果、流布本の内容が誕生したのか、流布本が生成されるプロセスを明らかにすることを目指した。改作の変遷を通史的に考え、後出諸本を含めて総合的に物語を捉える視座は先行研究にはないものであり、報告者独自の観点である。
さらに上記の作業と並行し、流布本の文脈を追うことで、制作環境を絞り込むことも視野に入れた。

(2)　教訓書などの作品を調査
（調査対象：教訓書・武家故実書・御伽草子）
教訓書と呼ばれるジャンルの定義は、『日本古典文学大辞典』（1983）で「教訓」として立項されているに過ぎない。日本文学における先行研究としても、近年のものでは鈴木彰氏による武家故実書に着目した科研費による調査があるのみで、教訓書全体を正面から扱った日本文学研究は確認出来ず、教訓書の定義付けもない状態が続いている。そこでまず必要な作業として挙げられるのが、教訓書に関連する作品を網羅的に調査し、体系付けていくことであり、諸本調査を研究方法の一つとして採用した。

(3)　流布本・教訓書の関連性と、当時の社会情勢を整理
（調査対象：15～16世紀の史料）
流布本両物語と教訓書の関連性を把握するにあたり、流布本両物語に見える価値観と、教訓書の価値観に着目するという方法を採る。さらに武士や軍記物語に言及がある教訓書などに関しても検証を進め、それらを読解することで軍記物語が担った役割を把握していく。そうした作業を通して、流布本『保元物語』『平治物語』の価値を文学史上に位置付けることが可能になると考えられる。
さらに、軍記物語や教訓書などの享受が見える15～16世紀の日記史料を中心に、人々の社会への認識を整理し、社会情勢が文学に及ぼした影響を検証する方法も提示した。流布本が成立した時期の日記史料において、当時の世を「乱世」と捉えているものは多い。そもそも作品が作られる際には、読み手の状況を想定していない可能性は低いと考えられ、世の中に対してどういった認識を持った人物が軍記物語や教訓書を読んでいたのか、実際の読み手による当時の認識を捉え、作品の特性への関わりを考えることを目指した。

４．研究成果
研究成果としては、流布本両物語の内容・特性に対する研究に基づく成果、諸本調査に基づく成果、流布本両物語と教訓書の関連性の調査に基づく成果、の3つに分類することが可能である。いずれも、今後の研究に進展し得る調査結果を得ている。

(1)　流布本『保元物語』『平治物語』の内容・特性に対する研究に基づく成果
他系統の諸本の検討と並行して、流布本両物語の内容を検討し、成果をまとめた。
まず流布本両物語では、子どもの哀話において、「涙」の表現を削除している。流布本『保元物語』は物語全体で重視する〈秩序〉意識と連動し規範となる子どもの姿が書かれているのに対して、流布本『平治物語』は、物語全体で意識する、〈武士の振舞い方〉としての相応しさを考慮しつつ、助命に関わる頼朝の涙を目立たせる意図も含めて、子どもが泣く姿に着目して、哀話を改作している。根本となる価値観は異なるものの、両物語ともに、子ども自身の悲しみの記述を増補することは目的とせず、子どもの哀話はそれぞれの物語が重視する価値観を支える一端となっている。流布本両物語が成立した15世紀後半～16世紀前半において、『保元物語』『平治物語』が「諸侍の子息たちに読ませるべきもの」として考えられていたことは先行研究において指摘されている。それを踏まえれば、こうした流布本の子どもの哀話が子どもへの教訓となっていた可能性もあると考えられるのである（５．主な発表論文等〔雑誌論文〕(4)）。
また、流布本両物語における人物造型も明らかにした。流布本『保元物語』では、為義と為朝との入れ替えの問題を端緒として、為義に関わる記述の改変の性質から、為義像が拡大されていることを指摘した。その一方で、実際の戦闘の担い手は為朝に委ねられ、為義の戦いぶりは記されることはないため、為義は物語全体の批判から免れることになる。さらには潔い人物として造型されているが、その理由として、為義処刑の際に「義」を中心にした忠孝論が展開されることから、流布本が説く〈秩序〉の一つである「義」を説得力のあるものにするために、その「義」に関わ

る為義は拡大されていると言える。また、流布本『平治物語』では、義朝が「朝敵」であることを書くことを避ける傾向にあり、立場を変化させている。加えて、彼の子どもや義朝を討った長田といった周辺人物の記述から義朝像が拡大されていると言える。さらに義朝は、武士としての体面を意識する、武士の大将として造型されている。その理由として、義朝が作中「忠節」をした臣下と位置付けられ、義朝ありきで源氏が繁栄したとされることから、義朝像の拡大は、流布本『平治物語』の「臣下がどう振舞うべきか」という志向に対する、一つの答えの型を示すためにされたと考えられるのである（５．主な発表論文等〔雑誌論文〕(3)）。

また、流布本両物語において、女性哀話がどのように先出諸本から改作され、作中で機能しているのかを分析した。それにより 15・16 世紀当時において軍記物語を改作するときにどのような意識が働くのかという問題を捉えることが可能である。流布本は為義北の方の哀話や常葉の哀話において、子どもとの関わり部分を比較的省筆し、先出諸本とは異なる部分に比重を置いて改作していると考えられる。それは作品内部や外部の世界との連動が考えられることを指摘した（５．主な発表論文等〔学会発表〕(2)）。成果は論文として投稿予定である。

(2)　諸本調査に基づく成果

内容分析の前段階として、流布本『保元物語』『平治物語』の善本候補の写本を調査した。具体的には、『保元物語』は大東急記念文庫本・名古屋市蓬左文庫本・東京国立博物館本、『平治物語』は宮内庁書陵部本・陽明文庫本・蓬左文庫本・福島県三春町歴史民俗資料館本・仁和寺本の原本調査を行うことが出来た。さらに、流布本と京図本（京都大学附属図書館本）系統の両物語の比較作業も、京図本系統の写本の原本調査を交えつつ進めることが出来た。これらの本をより深く検証するため、その比較対象として他系統の本にも視野を向けて諸本調査を行い、それにより研究の基礎となる土台を固めることが出来たと同時に、(1)に掲げたように新たな成果を複数出すことが出来た。

さらに、これらの諸本調査を行う中で、申請当時には予想していなかった新たな資料などを見出し、その成果も提示することが出来た。その一つとして挙げられるのが、センチュリー文化財団蔵（斯道文庫寄託）『平治物語』であり、この資料の検証を通して、後出諸本の交渉関係の一側面を明らかにし、『保元物語』『平治物語』の本文と絵画の関わりについて、より踏み込んだ成果を示すことが出来た（５．主な発表論文等〔雑誌論文〕(1)）。

また、早稲田大学図書館に所蔵される『保元物語』『平治物語』にも焦点を当て、該本の識語を書いた「津田葛根」という人物の素性を明らかにすることで、近世における軍記物語の享受の実態の一例を解明した。葛根は軍記物語以外にも〈武〉に関わる書を収集していた人物である。それは彼が所属していた小浜藩において、年譜などを書き記す右筆の仕事をしていたことに関わることを明らかにし、軍記物語の古写本の購入もそれに連動することを指摘した（５．主な発表論文等〔雑誌論文〕(2)）。また口頭発表を行う中で、対馬における新たな資料の教示なども質問者より受けることが出来（５．主な発表論文等〔学会発表〕(1)）、こうした調査は今後もさらに進展が見込まれる。すなわち、古写本を調査する中で、その購入者や書写者、享受者に関する研究も進み、報告者はこうした観点による研究の有効性も示すことが出来たと言える。このような物語の購入者・書写者・享受者に関する研究は、報告者は今後も課題として確立させ、進めていく次第である。また、近世における『保元物語』『平治物語』の享受の実態も、課題として提示していく。

教訓書の原本調査も予定していた調査先をほぼ確認することが出来た。従来の調査ではさほど注目されていない写本の情報についても、新たな知見を得ることが出来ており、軍記物語と関わりがあると考えられるものも多く存在していた。すなわち軍記物語を始めとする〈武〉に関する書と教訓書の関連性の研究は、引き続き研究を進めていく必要がある分野であることが確認出来た。今回の調査結果を踏まえて、今後も分析は進めていく予定である。

(3)　流布本両物語と教訓書の関連性の調査に基づく成果

流布本『保元物語』『平治物語』と教訓書の関わりについて、流布本両物語が互いに影響関係を持ちつつ、なぜ別の価値観を説く物語へと終着したのかという着眼点を持つことで、流布本両物語と歴史認識の連動も交えて成果を出すことが出来た（５．主な発表論文等〔雑誌論文〕(5)）。具体的には、作中の合戦場面に着目すると、流布本段階で先出諸本から削除・改変している要素が両物語で異なるが、それは各物語の戦乱に対する意識の違いの表れと考えられる。流布本『保元物語』は戦いを抑制する傾向にあるが、保元の乱は常に歴史書の中で〈動乱の始まり〉と位置付けられ、流布本も同様の認識を持つ。そうしたイメージが強い乱を主材とするからこそ、戦乱を楽しむ作品になることを避けたのではないかと考えられる。また平治の乱は、次第に武士政権の樹立の契機の乱として、更には後の源氏の〈統治の始まり〉も意識した歴史認識の中で捉えられていく。そうした、乱の先に世の安定を見出す認識が、流布本『平治物語』に見える、武士の模範を提示していく姿勢に繋がっていると考えられる。そして流布本は各乱をただ物語の題材と見ているわけではなく、教訓性が軍記物語周辺に求め

られていく 16 世紀の社会を背景に、流布本の改作が従来の諸本の改作とは全く異なる性質のものであることを明らかにした。
本研究成果は、今後、軍記物語全体と教訓書の関連性を考える際に、軸となる検証結果と言えよう。

以上のように本研究に基づく成果を提示することが出来たが、本研究の位置付けとインパクトは、流布本両物語を通して『保元物語』『平治物語』の基礎的な調査・検証の土台を固めつつ、流布本が特定の価値観を明示する作品に改作されているという分析を基軸として、16 世紀の動乱期の社会が生み出した多くの教訓書の価値観との関連を検証することで、動乱期における軍記物語の役割の把握の手掛かりを得られたことである。これは国内外においてこれまで着手されていない点であり、インパクトのあるものと考えられる。加えて、流布本『保元物語』『平治物語』の研究としても、このように作品を正面から取り扱い、総合的な観点に基づく成果はこれまで存在していなかった（５．主な発表論文等〔雑誌論文〕(6)）ため、この点についても意義のある研究成果を提示することが出来たと言えるのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

(1)滝澤みか、「センチュリー文化財団蔵（斯道文庫寄託）奈良絵本改装絵巻『平治物語』の特徴―他諸本との交渉から―」、「古典遺産 67」、査読無、2018 年 3 月
(2)滝澤みか、「津田葛根と書物との邂逅―早稲田大学図書館蔵『保元物語』『平治物語』購入の背景―」、「早稲田大学文学研究科紀要 63」、査読有、2018 年 3 月
http://hdl.handle.net/2065/00056528
(3)滝澤みか、「流布本『保元物語』『平治物語』の人物造型―為義・義朝像の拡大を通して―」、「国語国文 86‐10」、査読有、2017 年 10 月
(4)滝澤みか、「流布本『保元物語』『平治物語』における子どもの哀話の改作―涙の削除を中心に―」、「伝承文学研究 66」、査読有、2017 年 8 月
(5)滝澤みか、「流布本『保元物語』『平治物語』における乱の認識と物語の改作」、「中世文学 62」、査読有、2017 年 6 月
(6)滝澤みか、「研究展望『保元物語』『平治物語』（二〇〇二・〇三年十月～二〇一五年九月）」、「軍記と語り物 53」、査読無、2017 年 3 月

〔学会発表〕（計 2 件）

(1)滝澤みか、「小浜藩士津田葛根と〈武〉に関する書物との関わり―近世における『保元物語』『平治物語』古写本購入の一例―」、軍記・語り物研究会 1 月例会、2018 年
(2)滝澤みか、「流布本『保元物語』『平治物語』の女性哀話の改作意図」、日本文学協会研究発表大会、2017 年

６．研究組織

(1)研究代表者

滝澤　みか（TAKIZAWA　MIKA）
早稲田大学・文学研究科・助手
研究者番号：20778683

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし